

部屋

僕の手が届かぬ場所へ
その声の哀しさ

哀しさ、と
君はそれを理解できない

僕の立つこの部屋の広さを
戻り、振り向く

みずから見出すことを
予測することの幻滅と幻影に沈める

それは胸でも、掌でもない
君が差し出すそれは、ただの「時間」だろう

扉を開き
戸外の大気に融かされるがまま
ああ、そしてこの胸の奥に射し込み、拡がるにまかせる陽光よ
お前の、その 掌こそ
・・・僕の心

空間とは何？
それは君の世界を形にするものですか？

あの^{このま}木間から洩れるものを
流れに導き、ちりばめること

おお、間接的に君が創造した世界よ
それを迷路のように楽しんでいればいい

心の中で呟くことなど 無感覚
大気に融け込んだ僕自身に包まれる そのことを

遥かに遠いようにみえたものが
いま、この胸に沁み入り、拡がっている

僕自身であることの その意味を体現する
僕自身であることの・・・同時に
何ものにも妨げられぬ・・・同時に
融合体であることの その意味を

君のその、ふるえる指をくれるなら
君自身から、かすかに融け出そうとしている・・・その指を

僕の手が届かぬ場所へ
その声の哀しさ

その胸の奥の
君自身の気付いていない広い部屋へ
戻ろう・・・

(2004.1.1)